

あゆみ通信

VOL. 200

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

あゆみの会総会 1/25 開催

例年12月開催の総会が、諸般の事情で2026年1月25日(日)に、あゆみの会結成の場所でもあります阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職)をお借りして開催することになりました。同窓会のつもりで、藤井善隆先生(前住職)のお話を聞きに来てください、お待ちしております。(別途、ご案内)

日時 **2026年1月25日(日)**
13:30~15:30予定
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
講師 藤井 善隆先生
(即應寺 前住職)

第2組報恩講勤修



2025年11月21日(金) 午後4時から、阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職)で第2組今年最後の仏事・合同報恩講が、組内の住職や坊主、そして門徒等32名が参加して厳粛に勤められました。

ご住職方の出仕で始まり、お決まりの「正信偈」、「念仏讃」は洵三、「和讃」は弥陀大悲の誓願を次第6首、「回向」は願似此功德を参加者全員で勤めました。休憩後のご法話は、尊 慶典先生(浄土真宗本願寺派、西成区 壽寺)で、報恩講が何故行われるようになったか、親鸞聖人のご生涯について、お身内の出来事等を交えながら、いわゆる「節説教」でお話いただきました。

参加者の皆さんは、先生のユーモアのある語り口を、興味深く、かつ楽しみながら、聞かせていた

だきました。休憩後はお齋をいただきながらの歓談。そして、吉田雄彦門徒会副会長(法山寺)の進行で同朋総会が開催され、先般の放送で西本願寺での「法話が長いから、参加者が少ないのか」を参考に発言を求められ、あわせてお寺での聞法会活動について発言があり、閉幕しました。

如是我聞
廣瀬先生の法話聞書
佛足寺 細川克彦



2年間学び続けた『初めての正信念仏偈』も最終回である第12回目を迎えました。

廣瀬先生は、はじめにテキストにある傍訳の源空章「本師源空明仏教」から最後までを読み上げられました。

そして、その中の「善悪凡夫人」について、善人とか悪人とか言われる人が本当にいるのでしょうかと問われました。

私たちは自分の都合で、あの人は善い人だとか悪い人だとか言っているのではないのでしょうか。何かの条件が変わったら善い人が悪い人になったり、悪い人が善い人になったりしていないのでしょうかと。

また仏教では「生死」と言うことは「迷い」を表しており、様々なこと、例えば健康、貧富、美醜などで2つに分けて、よいとか悪

親鸞のことば

凡人でも人を救うことができる

じんずうほうべん

神通方便をもって、
まず有縁を度すべきなり
歎異抄5条

念仏を称え、すみやかに阿弥陀さまの浄土に生まれ、すべてのものを救うことの出来る仏のさとりを得ることが大切である。そうすれば、縁のとても深い者、自分の父や母や子をまず救うことができる。そう親鸞は述べています。ここには、自力では人を救うことが出来ない悲しみ、そして、そんな身に念仏を与えてくださった阿弥陀さまへの感謝の心が流れています。凡夫がこの世で人を救得と思うのは思い上がり、凡夫が念仏して必ず人を救えるようになるのは誓願(本願)の力だと親鸞は言います。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

悪人の自覚

私たちが親しんでいます『歎異抄』に「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(第4章)という言葉があります。法然上人から受け継がれた親鸞聖人の「悪人正機説」と言われるものです。

自分も長い間、善人が救われるのだから悪人が救われるのは言うまでもないという立場で、「悪人が救われる？」ということに疑問が続いていました。

でも、重ねて聴聞して「悪人」が世間で言う罪を犯した悪い人ではなくて、自力ではさとりを得られず他力を頼る者を指すと言うことを教わります。

聞法を重ねても、頭では分かっても、なかなか自分が悪人だと言う自覚が出来ません。

先月85歳を迎えて、人生を振り返り、少しは「悪人の自覚」が始まったかなと、思うことです。聞法第一。ひたすら聴聞していくばかりです。(本)

いとか言って、そのために苦しんでいるのではないのでしょうか。

また、「本願を疑う」とは、自分の思いを中心に行っていることではないかと。そして、この迷いの世界を出ませんかと教えてくださっている。

休憩後は、「本当に生きる」と言うことについて何人かの文章を紹介されました。ある人は「いい生活はしてきたけれど、本当に生きたことはなかった」と言われ、ある人は「お金でもない、名声でもない、何か欲しいのです。何かは分かりません」と言われたと。

先生は、親鸞聖人と法然上人との出会いについて書かれた「善き人にも悪しきにも、同じように、生死出べきみちをば、ただ一筋に仰せ候いし」(恵信尼消息より)を紹介されました。

そして、さだまさしのCD「いのちの理由」をかけてくださり、その歌詞の中の「しあわせになるためにどれもがうまれてきたんだよ」について、「誰もが生まれてきたんだよ」とは「善き人にも悪しきにも」であり、比べてばかりで苦しんでいる私たちに、「幸せになるために」とは「生死出べきみちをば、ただ一筋に仰せ候いし」ではないかと話されました。

「あゆみ通信」 200号に思う 本持 喜康

『同朋新聞』(661号)の2012(平成24)年12月1日発行の通信員リポート「現在を生きる124」に、澤田見通信員(12組青翠寺)に紹介いただいた記事が掲載されています。

「聞法の道を共に歩む新聞作り」です。この記事を見てくださった新田修己先生(4組正業寺)は、当時の第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」(2012年11月24日)の冒頭で、こう紹介していただきました。

「昨日、同朋新聞が届き、本持喜康さんの「聞法の道を共に歩む新聞作り」が掲載されておりまして、とても良い写真だなと思います。お念仏を喜んでおられるような写真です。私たちは「発信する」と言うことを軽んじて来たのではないかと、そんな気がします。こう話されていることに深く心に残りました。発信と言うことは、何らかの



形で人に手渡ししていく。ですから、聞法させていただくことで終わらずに、聞法したことを人に伝えていくことは大事なことでと思います。発信と言うと、たれかれに限らず、ご縁のある方に届けていく。それは聞法会から帰って、配偶者に話されることもあるかも、それも発信です。ある時はまた、ご縁の方にも、こういう会があったのだと話されるのも発信です。それぞれのご縁をいただきながら、そのご縁を通して、教えを自分だけ聞かせていただくことにしないで、出来るだけ多くの人と話し合ってみる。別に話さなくても、それにちなんで、そういう関係のある話をされるのも大事なことです。だから、学んだことが人に伝わっていく時「学んだ」と言うことが成り立ってくる。自分の中で留めて置く限りは、学んだことにならない。そのことを本持さんは、発信するということに、どこかで軽んじて来たのではないだろうかと、自身の反省の言葉を述べておられるのが深く心に残りました。

11月の「南無堂新聞」で、「共にお念仏の喜びを分かち合う聞法紙」というタイトルで、自分の生活の中であゆみ通信を発刊していることは、日常生活の中で大事な生きる支えである言うことを述べておられる。お念仏の喜びを分かち合う。念仏申していく。どんな時にもお念仏を申していく。そのことに尽きる。それ以外何もいらない。嬉しい時も悲しい時もお念仏をもうさせていただく。一番大事なことです。少しの期間、養成講座でご縁を共にさせていたのです。(後略)

懐かしく、感慨深く思いました。新田先生には、2007年～2008年の第2組が10数年ぶりに開催した推進員養成講座の講師として、ご指導をいただいていた。

また、以後も第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」で、10数年に渡って「正信偈」について、お念仏の教えを聞かせていただきました。感謝です。父母

佛足寺同朋の会 学習会のご案内

第2組寺院の佛足寺(清水拓住職)では、2023年から第1期の学習会が始まり、ご門徒さん達が参加されています。今回清水住職から、自坊のご門徒だけでなく、ご参加くださる方は、どうぞと声掛けをいただきましたので、ご紹介します。

今回は、当日から、全10回を予定されています。皆さんもどうぞご参加くださいとのことです。

日時 **12月15日(月) 13:30**

会場 佛足寺(天王寺区北河堀町)

講師 藤井 真隆先生(即應寺)

参加費 無料

講題の一部「はじめての真宗の教え」「初めての親鸞聖人」「やさしい真宗の教え」「真宗の基礎のお話」など。

の死を契機に、即應寺にご縁が仕来たこと、そして、藤井善隆住職(当時)や、真隆住職の教えに出会ったこと。学生時代から、カリ版をかりかりと書きながら、始めた新聞作りは、就職した後も組合の新聞や、仕事でも広報にかかわることとなり、それが即應寺の「慈光会ニュース」や「あゆみ通信」に引き継がれてきたことでした。自分か仕来ることは何処と考えて始めた新聞づくりでした。

それからいつの間にか、17年が過ぎて、たくさんの皆さんのおかげさまで今日を迎えることが出来ました。

あらためまして、あゆみの会 誕生のきっかけとなりました2007年の第2組推進員養成講座で、受講生を上回るスタッフとしてお育てをいただいた第2組の住職や坊主、そして門徒会の役員の皆さんにあつくお礼を申し上げます。

また、いろいろな場所で、宗祖親鸞聖人の教えを伝えてくださった師友の皆さんにもお礼を申し上げますと共に、ご一緒に、「共に」聞法して下さったあゆみの会の友人の皆さんにもお礼申し上げます。

今年で85歳を迎えます。聴けども、聞けどもですが、仲間の皆さんと「共に」いただくお念仏の教えの白道をこれからも歩み続けようと思います。

あらためまして、本当にありがとうございました。合掌。